

こども教育会議 会議録 (速記メモ)

<p>日時 令和5年1月25日(水) 13:30~14:30</p>	<p>場所 武雄市役所 災害対策本部室</p>	<p>出席 小松市長、松尾教育長、 教育委員(馬場、山口、牟田、岡本、田中、大渡、井手) 秋月こども教育部長、諸岡こども教育部理事、 教育総務課(木村課長、草津課長代理)、こども未来課(古田課長)、 学校教育課(小川課長、井手室長)、生涯学習課(野口課長)、 文化課(山北課長、井手室長)、市民協働課(鳥越課長)、スポーツ課(石橋課長)、こども家庭課(田寄課長)、健康課(西山課長)、 庭木企画部長、企画政策課(弦巻課長、小柳係長)</p>
<p>1. 協議件名</p>		<p>第31回こども教育会議 (教育大綱「組む」の振り返り)</p>
<p>議事録</p>		
<p>内容</p>	<p>1 開会(進行:庭木企画部長)</p> <p>2 議事(議事進行:小松市長)</p> <p>(1)教育大綱「組む」の振り返り</p> <p>①話題提供</p> <p>教育総務課から、令和元年度から令和4年度までの教育大綱「組む」について、取り組みや成果について説明を行った。</p> <p>②意見交換</p> <p><出席者の意見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「組む」はいい教育大綱だと思うが、汎用性があるが故に、具体的に何を想定していたのか、保護者やこどもたちにメッセージが伝わっていたのか疑問がある。今後は、保護者やこども向けに教育大綱の解説があってもいいのではないか。 ・基本理念に「未来を担うすべてのこどもを主人公に」とあるが、まだ大人目線が多いと感じる。国でもこども家庭庁設置の動きがあるように、もっとこどもを中心に考える必要がある。 ・教育に関する事業は非常にうまくいっていると思うが、教育大綱「組む」については、誰と何のために組むのかという具体的なイメージが湧かないため、こどもたちへの説明が難しく困っている。 ・インターネット上には情報が溢れているからこそ、伝え方が課題である。行政が力を入れている部分を市民へしっかり発信できれば、その情報をヒントに、民間同士が「組む」新たなアイデアが出てくるのではないか。 ・「組む」事業において、これまで主に行政が主体となってきたが、民間同士などが主体となるような発展の事例があれば紹介してほしい。 <p>→スポーツ課) サムライ合戦については、さわやかクラブ武雄、NPO 法人 A スタ、花まる学習会が組み、コロナ禍のこどもたちに何かできないかということで開催された。同じく、障がい者ニューススポーツ交流会についても、さわやかクラブ武雄と(株)愛まんてんの民間同士で組むことで、実現した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・武雄市は他の自治体よりも ICT 教育が進んでおり、意見の共有や共同作業など、タブレットを通して新しい学びの場が出来ている。また、学校に行かなくても、オンライン授業などで学べるため、学びの場の保証ができています。 ・考える時間を3分とするなど、細かく授業の時間が区切られているため、子供たちの疑問などに全て答えられているかが気になる。たまには、時間に縛られず、とことん考える場があってもいいのではないか。 	

- ・ICT活用の点では、学校と家庭が協力しあって、休校時のオンライン授業などが浸透している。武雄市は全国的にも進んでいるが、市内での二極化が起きない様、職員への引継ぎなどしっかり行って頂きたい。
- ・コロナ禍で実施できない時期があったが、花まるタイムについては、地域が子どもから元気をもらい、子どもたちは地域の方から褒めてもらうことで地域愛を感じるという、相互にとって良い関係であると思う。
- ・部活動の地域移行については検討中であるが、武雄市は花まる学園で地域と関わる体制ができているので、進めやすいのではないかと。今以上に、子どもと地域との関わりが増えればよいと思う。
- ・学校教育では教えきれない様な、平和教育や環境問題などのリアルな社会問題を、子どもたちも地域の一員として、色々な世代の方と話せる場があればよいと思う。ネットで何でも調べることが出来る時代だが、地域の方との対話を通して、もっと成長ができるのではないかと。
- ・子ども時代に、ふるさとの良い印象があれば、大人になってもふるさとを応援してくれるはずなので、ふるさと教育に力を入れていきたい。
- ・地区の子ども会行事に大学生が参加してくれたことがあるが、子供たちの反応がすごく良かったため、若者の地域参画は地域に良い影響があると感じた。
- ・「組む」のおかげで、子どもたちへのサービス、支援が非常に充実できた。課題として、学校、民間団体が相手だと、継続的にうまくいくが、地域や十分組織化されていない相手だと、持続性が懸念される。
- ・少子高齢化に伴う地域の疲弊、弱体化が目につく。そこに目をつぶってはいは、「組む」が継続的な取り組みになり得ないのではないかと。地域をどう支援していくかが今後の課題。
- ・地域だからこそできることを提供していくことが、先生の働き方改革にもつながる。民間やそのほかの力が「組む」ことで、先生が最高のパフォーマンスを発揮できる環境が作れるのではないかと。
- ・子どもの笑顔コーディネーターについては、福祉と連携した支援を行うなど、重要な役割を担っている。個人情報保護は前提だが、必要な情報を共有し、支援に結び付けることが重要だと考えている。今後も連携を大切に、問題解決にあたってほしい。
- ・学校現場では、子どもたちの気持ちを大切にすることや、一人ひとりに応じた環境準備などの福祉的要素の増加が大きな課題となっている。花まる学園では、地域が学校を支える力になっていたが、コロナ禍で「地域の役割」が、学校の負担として重くのしかかっているのではないかと。
- ・今後、歴史資料館、学校教育課、学校が連携を深め、副読本と学習カリキュラムの対応表作成などを行うとのことであるため、児童が学びやすくなり、郷土愛が育まれていくのではないかと。
- ・学校には昔からの変わらないルールや固定観念があり、息苦しさを覚える子どもや親がいる。学校でも教員の働き方改革が進められているが、併せて保護者、学校が組み、子どもたちが楽しく、安心して通い易くなる「通い方改革」行うべきではないかと。
- ・幼稚園、保育園での事件や事故のニュースが多い。何かあったときに、保護者、先生が相談できる市の関連施設があれば安心できる。

(教育長)

- ・令和元年から4年間はコロナ禍、二度の水害と厳しい状況であった。プラスの面では新幹線開業、マイ茶碗作戦など、色んなところと組んで、子どもたちを中心に支えていただき、一步一步進んできたのではないかと感じた。
- ・武雄市では高校生が市の動きに対し、積極的に地域に関り、考えてくれている。武雄市にとっても有効に働いているのではないかと。
- ・部活動の地域移行は特に、地域と組む重要性が高い。組み方が弱いと、子どもたちが犠牲になってしまう恐れがある。

<市長の発言>

- ・今日の検証を踏まえて、新年度に次の教育大綱について議論していきたい。しっかり検証をすることで、はじめて次につながる。出てきた課題を解決するだけでなく、将来を見据えてバックキャストで考えることも大切。
- ・コロナで子どもたちの行動に制限がかかった中、まわりの皆さんが組むことで、学び、育ちを支えてもらったと改めて感じた。
- ・文化に関する副読本の新しい活用の仕方や、花まる学園でできた仕組みを部活動の地域移行に応用するなど、今あるものをしっかり使っていくことは大事な発想。
- ・教育委員の意見を聞いて「対話」、「メッセージをしっかりと伝える」、「リソースを広げる」、「安心」、「そもそもから考える」、「関係者を増やす」、「保護者、子どものニーズの吸い上げ」、「教育現場の範囲を捉え直す」などがキーワードであると感じた。
- ・読まないものを作っても意味がないという考えから、シンプルな教育大綱をつくったが、目指す教育の姿の前に「組む」という手法が前に出て、その下に指針がある状況。次の教育大綱はより分かりやすくビジョンを示す必要があると感じた。
- ・自由に自己表現できる場をつくるなど、若者に対するサポートについては自治体で欠如しがちな思想であるが、今後クローズアップしていくべきだと思っている。
- ・「組む」は押しつけではない。お互いを尊重して、対等な関係であるべきである。
- ・新教育大綱についての議論は、子ども教育会議の場だけで十分か、プロセスについて検討する必要がある。
- ・「変えるべきもの」「変えたらいけないもの」両方あると思う。新大綱をつくるうえでは、そもそもから考えていきたい。

3 閉会(進行:庭木企画部長)